

新たな命が生まれる季節に神々と黄泉の国とそして女性を考える

1 節分のお祭りとお祭りに込められた日本人と神々の関係

春祭りの季節ですね。

日本のお祭りは、現在の暦でいうと、まず、2月くらいに節分のお祭りがあります。この祭りは、「新しい年を迎える」というものです。新しい年に、その年が良い年になるようにお祭りや儀式をして新しい年を迎えるという感覚です。日本の場合は、「一年」という新しい年が「やってくる」という感覚です。「やってくる」というのは、まさに玄関からお客様が入ってくるかのような状況で、新しい年を迎えるのです。これは、日本では「八百万の神」というように、すべての森羅万象に神がいると考えられているからです。一年という「概念」にも「神」が存在するというような感覚があり、その神様が、入ってくるというような感覚です。ですから、その新しい年の「神様」を、最も大事なお客様を迎えるように、準備する。そして、「新しい神様がやってくる」ということで「お祭り」するというのが、この2月の時期のお祭りになります。

秋祭りは、逆に「感謝」のお祭りです。秋には収穫があります。日本の場合は、稲作が中心ですので、お祭りに関しても稲作の収穫が中心です。ですから、秋になると稲穂がモミをたくさんつけて収穫の時期になります。何度も言いますが、日本は「八百万の神」の国です。そのために、収穫は神様のおかげであると考えられていますし、また、お米一粒一粒の中にも「神様」がいると考えています。一つには収穫を得ることができたのは、神様が様々な力を与えてくれて、稲を育ててくれたからということがあります。しかし、それだけではなく、稲という一つの命を戴き、その稲の神様を戴くということに関して「お祭り」を行うのです。稲の神様が村人のところに来たということで、また、今まで頑張ってくれた稲という植物の神様に、そして、土の神様、水の神様、そして太陽の神様、稲を育てるのに必要な様々な神様に感謝をするということ、その神様がみんな詰まっているのがお米の一粒一粒になっているというような感覚になるのです。ですから、日本人の中、特にお年寄りの中には、「お米の一粒には七人の神様が入っている」というようなことを言う人がいます。土の神様や、水の神様といった関係する神様は、みないなくなってしまうのではなく、その神様がお米の中に入っているというような感覚を持っているのではないのでしょうか。

日本人の中には「もったいない」というような感覚があります。この言葉は、最近になって、「MOTTAINAI」と英語になって世界に広まっているようです。これは「有用なのにそのままにしておいたり、むだにってしまったたりするのが惜しい」という意味から、現在では「資源を大切にしよう」とか「リサイクルを推進する」というような運動の世界的な広まりから、この言葉が出てきています。

そもそも、この「もったいない」、実は漢字では「勿体無い」と書きます。「勿体」とは、もともと仏教用語で「荘厳な」「威厳のある様」というような意味です。もったいないとは「荘厳な状況ではなくなる」というような意味でしょうか。まだまだ使える物を「荘厳な」とか「威厳がある」というのは、その「有用な物」は「神様が宿っている」というような感覚を持っているので、「神様を粗末に扱う」というような意味につながるのです。

よく、ご飯を残したりして「もったいない」と言われるのは、まさに「ご飯の中に入っている神様を粗末に扱う」ということを言ったこととなります。

ちなみに、現在世界で広まっている「MOTTAINAI 運動」というのは、ケニア出身の環境保護活動家であるワンガリ・マータイさんが広めたもので、京都議定書関連行事のため、毎日新聞社の招聘により日本を訪問した時に、当時の小泉純一郎首相と会い、“wasteful”という言葉を使用したのが、「もったいない」という言葉を使ったと報道されたことをきっかけにこの言葉を使い始めます。「もったいない」に感銘を受けた後、この意思と概念を世界中に広めるため他の言語で該当するような言葉を探したが、

- ・ 「もったいない」のように、自然や物に対する敬意、愛などの意思（リスペクト）が込められているような言葉が他に見つからなかった。
- ・ 消費削減（リデュース）、再使用（リユース）、再生利用（リサイクル）、尊敬（リスペクト）の概念を一語で表せる言葉も見つからなかった。

そのため、そのまま「MOTTAINAI」を世界共通の言葉として広めているといえます。

日本のように、さまざまなものに神様が入っているというような考え方がなければ、「敬意や愛」が含まれる言葉にはならなかったでしょう。日本の場合は「神様を粗末に扱わない」ということが最も重要な概念になっていますから、その感覚が、世界の人々には「自然や物に対するリスペクト」というような感じに受け取られるのでしょうか。この「神様」と「自然」という感覚の違いも、なかなか興味深いものです。

2 春祭りと日本の神々の性質

さて、少し話がそれましたが「春祭り」の時期です。春祭りは、「秋祭り」と違い、これから田植えや種まきをする時期です。

立春から立夏まで、ですから旧暦の2月初旬から5月初旬までに行われる神事祭礼のことを言います。2月の初午（はつうま）、4月の卯月（うづき）8日などが代表的なお祭りということが言えるのではないのでしょうか。もちろん、お祭りの内容も、またその名称も地域や

神社によって変わります。浅草などは三社祭ですし、京都では葵祭です。いずれも春祭りの代表的なお祭りではないでしょうか。このほかにも「博多どんたく」なんかも、少々趣旨は異なりますが、春祭りの一種ではないでしょうか。お祭りというものは本来、季節をもたらす行事です。新年のお祝いのように「これから神様を迎える」ということを趣旨にしていますから、当然に、その季節の時期に合わせた季節感覚よりも先行するような儀式が多くなります。春は万物の生育する時節です。これは、日本の「八百万の神」の考え方から見れば、冬の間山にこもってしまった神様が、山から降りてきて、植物を育て花を咲かせるということです。その植物を育て花を咲かせる神様を迎え、田の仕事を開始する、要するにこれから田植えをする予祝祭となっていることが多くなります。田植えという意味で「季節が先行する」という感覚になります。

実は、この時期、日本の多くの場所では田植えが終わっているか、あるいは田植えの真っ最中です。しかし、「古代米」は、現在の暦で5月の終わりから6月にかけて田植えを行います。そのために、古代でいえば、旧暦の4月、現在の暦で5月中旬までのお祭りは、「春祭り」になるのです。

古代律令制で神祇官所祭の四時祭では、仲春2月の祈年（としごい）（祈年祭《きねんさい》）と季春3月の鎮花（はなしずめ）（鎮花祭《ちんかさい》）とが春祭りに当たるとされています。これは、縁起のいい花が散るときに、疫病神や悪霊が活動するのだと考え、これを鎮めるために「花鎮祭り」を行いました。

大宝律令を解釈した「令義解（りょうのぎげ）」（834年）の中には、

「謂ふ。大神（おほみわ）、狹井（さゐ）の二祭なり。春花飛散の時に在りて、疫神（やくじん）分散して癘（れい）を行ふ。その鎮遏（ちんあつ）の為に、必ずこの祭りあり。故に鎮花（はなしずめ）といふ。」（謂。大神狹井二祭也。在春花飛散之時。疫神分散而行癘。為其鎮遏。必有此祭。故曰鎮花。）

とあり、これが律令の正式な内容になっているということがわかります。春に農事を開始するにあたり、その年に降りてくるさとの神様に対して、一年の稲作とそのほかの作物が無事に成長して豊かな年になるように祈る祭りが祈年祭です。当然に「豊か」であるということは、自然災害もなく、また、戦争などもなく「平和である」ということが大前提です。まさに神様に「一年間平和で豊かな年になりますように」と祈るのです。そして、鎮花祭は古来御霊を意味する「モノ」、それが疫病や、豊かさや平和を乱す「モノ」というものとなることを心配し、「モノ」の主である大物主神（おおものぬしのかみ）に対して、その神様のいる場所を花に見立て、「モノ」の飛散が悪疫を流行させぬよう落花を鎮める行事だとされているのです。

ここでまた疑問に思う人があるかもしれません。「神」がなぜ「疫病」を持ってくるのでしょうか。神様は、助けてくれるはずです。しかし、日本の神様は、必ずしも助けてくれるばかりの存在ではありません。「風神・雷神」のような神様もいますし、また、「荒ぶる神」「祟り神」といわれる、人間に仇をなす神様もいます。

日本人の考える神様は、「莫大なパワー」を持っているというような感覚で受け止められています。そのために、そのパワーが、良いほうに向かえば、「国を救う」ことになりますし、また、悪いほうに向かえば「国をつぶす」というような形になってしまいます。普段は怒らない神々を怒らせると大変なことになります。そこで、日本人は神々が、常に「穏やかで」なおかつ「恵みを与えてくれる」存在になるように、神様が好む方向で「お祀り」するので、神様といっても、必ずしも「人間の味方」ではないのですね。

3 無から有を作り出す黄泉の国と女性

同じような考え方が、日本においてはもう一つあります。まさに「黄泉の国」です。日本において「黄泉の国」とは、「死んだ者(物)」が行く場所でありながら、同時に、新しいものが生まれる場所でもあると考えられていたのです。そして、新しいものが生まれる場所には、必ず神々の意志と黄泉の国の力があると考えられていました。そして、その考え方が、「稲」だけでなく「子供」という意味で、日本人の間には「女性」に対する考え方に通じてくるのです。要するに、女性は、「何もないところから子供を宿して産み出す」という現実から「女性の胎内には黄泉の国に通じる道がある」と考えられていたのです。

古事記・日本書紀に現れてくる神々は、はじめのうちは、女性神も男性神も同格です。いやそもそも男女の区別がないともいえます。その天上界の神々が伊邪那岐命と伊邪那美命に国生み・神生みを命じます。国生みの神話において、この二人の神が交わる部分では伊邪那岐命が「我が身は成り成りて、成り餘れるところ一處あり。故この吾が身の餘れる處を、汝が身の成り合わぬ處に刺して塞ぎて、国土生みなさむと思ほすはいかに」と言って、これを伊邪那美命が「しか善けむ」と合意して、国を生むのです。この状態は、まさに男性の伊邪那岐命が提案して、それを女性側伊邪那美命が許可するという形式です。この古事記が書かれたときが、平安時代であったということを考えれば、ちょうど「通い婚」のような形になっていますね。

ここまでは、少なくとも日本の国土は女性である伊邪那美命が生みます。しかし神々ということになると、伊邪那岐命からも生まれてきます。天照大御神・月読命・素戔嗚命の「三貴神」は、黄泉の国から戻った伊邪那岐命が、禊を行うことで生まれてくるのです。これはどういうことかといえ、伊邪那岐命に「黄泉の国」の力が宿り、その黄泉の国の力に、神の禊が加わると、新たな神が生まれるということを表しています。この神話そしてこの神話が作られた時代は、人間に限らず「無から有を生み出す力」は「黄泉の国」によってもたらされると考えていたということになるので、女性でなければ子供を産めないというものではないというような感覚を持っていたのです。

当然に古代に関しては科学的な知識や医学的な常識は存在しません。そのために、子供が生まれるのは、これら「神生み」「国生み」と同じように、「刺して塞ぎて」黄泉の国と交信をすると、「黄泉の国」から子供が授かると考えられており、それは、やはり神話と同じよ

うに神々の意思であると考えられていたのです。

日本の場合「黄泉の国」は、新たな命を生む場所であり、同時に死んだ命が戻ってゆくところ。そのために、ある意味で神聖な場所であり穢れた場所でもあるのです。要するに人間の住む世界とすぐ近くにありながら、人間の住む世界と異質で、まったく異なる場所ということになります。そして、現実には生きている人間にとっては「死後行く場所」という意味で「穢れ」の部分が多くあるということにもなるのです。

人間は、この「黄泉の国」を神の力と同じように畏怖し、そして神聖なものとして扱いました。そして「近づいてはいけない場所」として認識するようになります。今生きている人が黄泉の国に行ってしまうと、それは死んでしまうということになるのです。まさに、古事記の中の伊邪那美命のように、身体に蛆虫がたかってしまい醜い姿になってしまうということになるのです。

この「黄泉の国」の力を強く発揮することが、人の生死を司り、また、村や国の盛衰に深く関与すると考えられていました。その力は「女性」、要するに「女性の中にある黄泉の国」にあるとされていたのです。

平安の時代くらいまでは、女性は「顔を見られてはいけない」というような習慣がありました。外出するときは牛車で御簾を下げて、檜扇（ひおうぎ）で顔を隠すというのは、顔を見られたら恥ずかしいという感覚があったからではないでしょうか。それは「黄泉の国につながっている自分」という「汚れた自分」を見られるということになり、それは「裸の自分」を見られるのと同じというような感覚になっていたのではないのでしょうか。

『源氏物語』、『伊勢物語』、『更級日記』や『今昔物語集』など、女性の「顔を隠す」という文化、これに対して、男性が「垣間見る」という方法で、隠している女性の顔、または肌を何とか見ようとする姿が様々に書かれています。書いている人の筆によって、内容は様々に異なりますし、その表現や方法はかなり変わりますが、いずれも、女性に対して男性が様々な工夫をしているという感じではないのでしょうか。何とか「美しい女性」を男性が口説こうとするというのは、昔も今も変わらないようです。

4 黄泉の国がつかないだ生み出す力と花と女性と神

このように考えてゆくと、「女性」と「神」とが徐々に一致してきます。地上に恵みを与える天照大御神は「女性神」ですし、また、歴史上に出てくる日本のシャーマン、卑弥呼も女王です。魏志倭人伝によれば、その女王卑弥呼の死後、男性の王が立つが、國中不服で国内で殺し合いがあり、卑弥呼の関係の「耆与」と言う女王が変わって擁立されることによって国の中が治まったとされています。このことは現代であっても神社における「巫女」が女性であり、巫女が神の使いとなってさまざまな神託を伝えると言う役目を負っている事などで、現代までその習慣と日本人の意識が伝えられているのではないのでしょうか。

「地」「太陽」「母」という三つの存在は、いずれも「無」から「有」を生み出す存在とし

て、人々に尊敬され、また、畏れられていたというような感じではないでしょうか。そしてそれらは「黄泉の国」につながっており、神々が直接何らかの作用を行うというような存在になっています。ある意味で「神そのもの」であったり、あるいは「神に最も近い存在」ということができます。そのために、平安時代は、今の神社において「ご神体を見てはいけない」というようなものと同じで、「女性の顔を見てはいけない」というようになっていたのではないかと考えられています。

そして、このように考えると「春祭り」の中心が「女性」であることに気づきます。この時期の京都の祭りでは有名なものは葵祭ですが、葵祭は、まさに、女性のお祭りということが言えるのではないのでしょうか。

葵祭といえば、流鏝馬が有名ですが、実際は欽明天皇の567年、国内は風雨がはげしく五穀が実らなかったのが、当時賀茂の大神の崇敬者であった伊吉（いき）の若日子（わかひこ）に占わせたところ、賀茂の神々の祟りであるというので、若日子は勅命をおおせつかつて、4月の吉日に祭礼を行い、馬には鈴をかけ、人は猪頭（いのがしら）をかぶって駆競（かけくらべ）をしたところ、風雨はおさまり、五穀は豊かに実って国民も安泰になったという故事に従って行われた祭りです。819年（弘仁10）には、朝廷の律令制度として、最も重要な恒例祭祀に準じて行うという国家的行事になったものです。

祭りには、近衛使・検非違使と・山城使・馬寮使・内蔵使による本列と、斎王代をはじめとする女人列による路頭の儀があります。この行列は、本列も女人列も平安時代の衣装を身にまとった人々が牛車とともに京都御所から下鴨神社を経て上賀茂神社まで行列するのです。

「斎王」とは、賀茂神社に御杖代（みつえしろ）として仕えるために皇室から差し出された内親王・女王のことです。斎王代を中心としてその周囲に、蔵人所陪従（くろうどころばいじゅう）、命婦（みょうぶ）、女孺（によじゅ）、童女（わらわめ）、騎女（むまのりおんな）、内侍（ないじ）、女別当（おんなべつとう）、采女（うねめ）らの華やかで可憐な行列が続くのです。この斎王と女人列が、葵祭の中心です。皇室の女性が、神様のところに行って禊をし、神様の使いに行くことが重要とされています。

やはり、神の使いになるのは、ここでも「女性」なのです。

「春」は物事を生み出す季節。そこに、物事を生み出す力を持つ「神」を祀るお祭りがあり、そして、「女性」が主役になって神々を鎮めるのです。特に鎮花祭等は、「花」が中心になり、その花が女性の象徴になってきているというものです。花と女性と春、なんとなく美しさや、趣味趣向のような話になってしまっていますが、実際のところは、このように「黄泉の国」という「生み出す力」で繋がっているという事になります。

最後に「男尊女卑」という考え方について少しだけ考えてみましょう。

男性は、このように日本の場合は「女性が中心」であるということをおかっていたこととなります。女性は、常に「御簾の中」に入っている「高貴な存在」であり、男性は女性を守る存在であったといえます。このことから、「人間の世界は男性」「神の世界や黄泉の国との

交信は女性」というようなすみわけができてきます。その中において男性が徐々に「人間の世界」で「上位」になってくるのです。もちろん、男性は、いかに大きな力を持つとも神々にかなうはずがありません。しかし、この考え方の中に、徐々に男性が上位になる考え方が輸入されてきます。まずは「仏教」です。仏教は男性が中心であり、女性がいることによって悟りが開けなくなるというような感覚になります。特に、煩惱の中の一つが女性というような教えになってくるのです。また儒教が入ってくることによって、「男尊女卑」の考え方になります。もともと「畏怖」する存在であった女性、特に黄泉の国とつながっているということから、黄泉の国の「ケガレ」の部分だけがクローズアップされて、女性は「穢れた存在」というような考え方になったのです。ある意味で「怖い」から「卑下する」というような感覚です。男性の場合、「好きな女性にいたずらする」というような心理が働く場合がありますが、そのような心理で女性を畏怖した反動が、男尊女卑という考え方になったのではないのでしょうか。

そして、日本の場合は、その「男尊女卑」で儒教が道德の基本になり、新しい価値観が入らなかった鎖国の時代が260年も続いたということで、それが定着してしまったということが言えるのではないのでしょうか。

この「男尊女卑」という考え方、そして、日本人の「男性と女性」ということは、もう少し深く考えてみなければならぬかもしれません。

いずれにせよ、春祭りの季節は、日本において女性が最も輝く季節なのかもしれません。